

しめのひとこと

志免町のいろんなひと、いろんなことをお伝えします！

38

「自宅で過ごしたい」に寄り添う

在宅療養のお手伝い

志免町在宅ホスピスボランティア「にじいろ」

福岡県の委託事業で実施されている「在宅ホスピスボランティア養成講座」を平成29（2017）年に受講したメンバーが、志免町を拠点に活動しているボランティアグループ。「にじいろ」の由来は、にじのようにいろんな個性のひとが集まって活動したいという思いから。



全国在宅ホスピスフェスタの出会いから「にじいろ」が始まる

にじいろ発足のきっかけは、平成27（2015）年横浜で開催された日本在宅ホスピス・在宅ケア研修会です。その分科会にのちのにじいろメンバーが参加して、福岡県内の在宅ホスピスボランティアを養成する取り組みを知り、感銘を受けたことで、志免町でも同様の活動ができないかと、計画し始めたのがきっかけです。

そして、平成28（2016）年福岡県内で開催された在宅ホスピスボランティア養成講座（以下、講座）を受講したメンバーで、翌年5月に「にじいろ」が発足しました。その頃の町内では、傾聴のボランティア活動はありましたが、在宅ホスピスのボランティア活動はありませんでした。

●在宅ホスピスボランティアとは

かかりつけ医や訪問看護師、ヘルパーなどと一緒に、住み慣れた自宅で過ごすことを望む患者さんやご家族に寄り添い、在宅療養のお手伝いをするボランティアのことです。



講座の受講生をメンバーとして受け入れています

在宅ホスピスのボランティアを養成する講座をにじいろが運営し、かつ修了生を「にじいろ」のメンバーとして受け入れています。そのため、在宅ホスピスボランティアという名称を用いて、しっかりとボランティア活動ができています。

メンバーの内訳は、家族を看取った経験や家族の介護に関わった方、他のボランティアとのかけ持ちも多いのが特徴です。そのため、ボランティアの意識が高く、思いのある方が多いと思います。自分の経験が他の人のため、社会のために役立てばという思いで活動する方が多いです。

現在の会員数：18名（実際の活動者は14名）
町内在住が9割
40代～80代（40代1名、60代以上が多い）



現在の主な活動は、例会と講座の開催です

現在の主な活動は、毎月の例会とコロナ禍を除いて毎年開催している講座の運営です。町内の在宅医



▲ 講座内で行われたカードゲームを使ったグループワークの様子

療を担う医師とのつながりがないこともあって、発足当初は、どうやって患者さんの情報を把握するのかが課題でした。

それでも高齢者の施設で傾聴ボランティアに参加したり、高齢者とお話するなど関わることで学びを続けました。コロナ禍は2年間活動できませんでしたが、令和4（2022）年から再開し、現在は町内のケアマネジャーなどと連携しながら、患者さん宅に訪問のボランティアができるようになりました。

例えば、外出のサポート（介護保険の適用範囲外）では、買い物にご近所さん感覚で同伴していますが、2ヶ月に一度のペースで続いています。何よりご本人の表情が明るくなり、ご家族にも喜ばれました。また今年は、人生の最期を迎えられたお宅に関わる機会が、町内で2件ありました。介護保険が下りるまでの期間に、買い物やゴミ捨てなどのサポートを行いました。支援の要望が急で、しかも数日間連続の活動でしたが、活動できるメンバーを募りサポートができたと思います。



にじいろを長く継続させるため、活動をゼロにしない

支援の要望に関わる情報がもっともらえると活動はもっとできるのですが、一方で現在のメンバーは他団体の活動や仕事や家庭の事情を抱えるメンバーもいますので、依頼がどんどん入ってもできない現状があります。活動はPRしていきたいですが、広めることに対する歯止めも同時にかけています。今

は一人一人が無理をせず、できる範囲内の活動で、まずは活動をゼロにしないこと、長く継続することを意識しています。



メンバーの成長に手ごたえがある一方で、抱えるジレンマ

毎年メンバーの多くは、講座の運営と受講の両方に関わることで、学習の再確認と新メンバーを増やすきっかけとしています。団体を確立し、継続できているのは、この講座のお陰です。

福岡県内で実施される在宅ホスピスボランティア養成講座は、ふくおか在宅ホスピスをすすめる会（福岡県の委託事業）と地域の団体（志免町では「にじいろ」）が協働で開催している。こうした講座の運営形態は、全国的にも珍しいという。

講座は毎年ほぼ同じ内容ですが、メンバーは毎年繰り返し受講することで学びを確認することができ、在宅ホスピスボランティアに関わることへの抵抗感を減らす効果があるようです。「もっと関わりたいかった」という思いも聞こえてきますので、メンバーの成長に繋がっている手ごたえを感じますが、現実として活動を頻繁にできないジレンマも同時に抱えています。



在宅医療を担う医師と活動が一緒にできれば

他の市町村で同様の活動している団体の多くは、在宅医療を担う医師が中心となり活動を行っています。

にじいろとしては、現在町内の活動に重きを置いていますが、在宅医療に思いを持つ医師と一緒に、在宅ホスピスの支援の仕組みづくりが、糟屋郡内の町にもこの活動が広がってほしいなと思います。



取材を終えて

「活動の継続を優先して、今広げるのはちょっとガマン」共感値の高いジレンマで、印象的でした。

